

## 社会科学研究所 定例研究会 報告要旨

2008 年 7 月 15 日（火） 定例研究会報告

日 時：16：00-18：30

場 所：社研生田会議室

テーマ：「洋食器産地“燕”の産地解体が意味するもの」

講 師：慶応大学教授 渡辺幸男

出席者：11 名

報告内容概略：

今回の研究会は、2008 年度社研夏季合宿研究会（新潟）の事前研究会として設定された。合宿研は、燕市と新潟市を訪問する予定であり、特に燕市の産業変遷について、2000 年に同市の実態調査をおこなった渡辺氏をお招きして話を伺った。

渡辺氏の報告は、金属加工の古い歴史を持つ燕市の、特に戦後の業態変遷を中心に行われた。戦後、燕市では輸出向け洋食器の生産地として活況を呈したが、1985 年頃を境として輸出向け生産が下降し始めた(内需は堅調)。これは急速な円高と中国の台頭に押された結果である。他方、1980 年代にはステンレス加工のハウスウエア出荷額が、特に国内向けで成長してきた。これは洋食器メーカー自身がハウスウエア生産に業態転換したのではなく、洋食器メーカーが既得権益化する中で、そこに入れなかった業者が新たに開拓したという。ただし現在ではハウスウエア生産も輸出向けは 1985 年を境にして下降している。

次に渡辺氏は、全体としては長期低落傾向にある燕市の従来型産業から、新たな方向が見いだせるかどうか、見いだせるとしたらどこにそれがあるのか、という「産地解体からの再生」へと話を移した。それは、第一に金属研磨部門やブランド化された洋食器生産など従来型分野のブラッシュ・アップ、第二にチタン加工などの新分野の展開、そして第三に自らは作らないが需要と直結した直接受注・直接納品の卸業など、具体的な企業を挙げて、そこに再生の可能性を探る。

渡辺氏によれば、燕市の実態調査から、国内の多くの産業集積において、今や中国との競争関係の中で、再生・発展の展望を持ちうるとしたら、「変化の激しい国内需要に迅速に対応」できることが重要であると指摘する。

渡辺氏の報告は、現在までの燕市における産業動向を踏まえたものであるが、基本的には 2000 年におこなった実態調査に基づく。渡辺氏自身の言葉でもあるが、その後の具体的な変化がどのようになっているのか、夏季合宿研究会は渡辺氏の報告を参考にしながら、実際の変化を見聞できるものになれば、より有効なものになるだろう。

記：専修大学経済学部・村上俊介